

Market Flash

発表日: 2018年10月31日(水)

生産は弱いが先行指標は上向いている

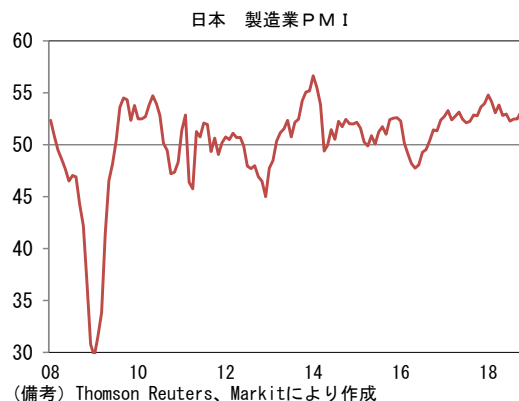
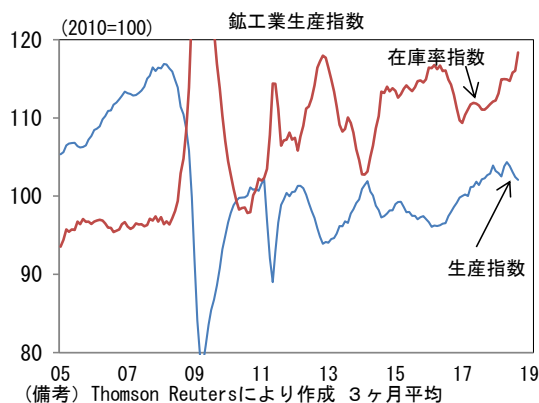
～株価も上昇基調に復するだろう～

第一生命経済研究所 調査研究本部 経済調査部
主任エコノミスト 藤代 宏一 (TEL: 03-5221-452)

- ・日経平均は年率10%程度の上昇カーブを描き、先行き12ヶ月で25000に到達しよう。
- ・USD/JPYは米利上げ打ち止めが視野に入中、先行き12ヶ月で100へと下落しよう。
- ・日銀は現在のYCCを2020年春頃まで維持するだろう。
- ・FEDは2019年後半に利上げを小休止する可能性があるだろう。

< # 鉱工業生産 # 製造業PMI # 受注残は増えている >

- ・9月鉱工業生産は前月比▲1.1%と市場予想(▲0.3%)を大幅に下回った。四半期ベースでは年率▲6.6%の減産となり、前年比でも▲0.2%の水準に落ち込んだ。同時に発表された出荷は▲3.0%、在庫は+2.3%、在庫率は+7.8%とバランスも悪い。自然災害の影響もあって生産・出荷が芳しくないなかで在庫が積みあがっており、増産シナリオが描きにくい状況に陥りつつある。生産予測調査は10月が+6.0%、11月は▲0.8%と比較的強気な計画が示されているものの、経済産業省が独自に試算した10月の予測値は前月比+0.9%と予測調査の計画を大幅に下振れている。
- ・他方、速報性と予測精度に優れた製造業PMIは10月に基調反転の兆しが認められている。ヘッドラインは53.1へと反発し、7ヶ月ぶりの水準に回帰。サブ項目をみても生産、新規受注が改善したほか、新規輸出受注が50の大台回復を伴って改善するなど内容も良い。また、この間に「受注残」が安定的に50を上回って推移したことは、自然災害からの挽回生産を除いても受注動向が堅調であったことを示唆しており、10-12月期に増産に復すこと示唆している。
- ・日本株は日本企業の減益を織り込むような割安な水準にあるものの、堅調なファンダメンタルズが確認できるにしたがって上昇基調に回帰するだろう。

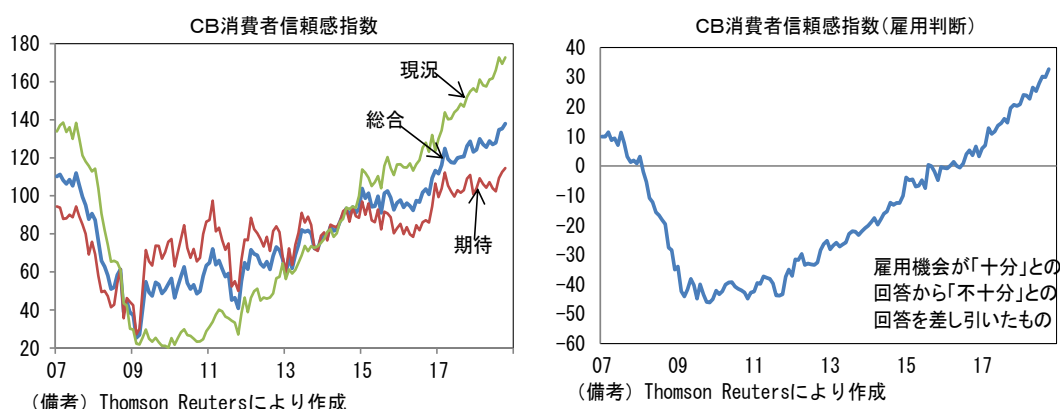


【国内株式市場・アジアオセアニア経済指標】

- ・日本株はUSD/JPY上昇を横目に欧米株高に追随。TOPIX、日経平均は双方とも1%超の上昇となっている（10：30）。
- ・日本の9月鉱工業生産は前月比▲1.1%と市場予想（▲0.3%）を大幅に下回った（詳細は上述）。

【海外経済指標他】

- ・10月CB消費者信頼感指数は137.9と市場予想（135.9）を上回った。現況（169.4→173.1）、期待（112.5→114.6）がそれぞれ改善し、2000年9月以来の高水準に回帰。雇用統計の先行指標として注目される雇用判断DI（雇用機会が「十分」との回答から「不十分」との回答を差し引いた値）は32.7へと一段と改善し、2001年1月以来の高水準に到達。



【海外株式市場・外国為替相場・債券市場他】

- ・前日の米国株は反発。10月入り後に10%近い下落を記録していることもあって押し目買い優勢。VIXは僅かに低下して23.4となったが、節目の20割れには距離がある。WTI原油は67.04^{ドル}（▲0.55^{ドル}）。
- ・前日のG10通貨はUSDの強さが中位程度。USD/JPYはアジア時間の日本株高を横目に上昇した後、欧米時間に入ると米長期金利上昇を横目に上昇し113を回復。EUR/USDは1.13半ばへ水準を切り下げた。
- ・前日の米10年金利は3.123%（+3.8bp）で引け。マクロ面で材料に乏しい中、欧州債金利の上下に追随した後、米国株高を横目に金利上昇。欧州債市場（10年）はドイツ（0.369%、▲0.8bp）、フランスが概ね横ばい、スペインが小幅に金利上昇、イタリアが大幅に金利上昇。予想を下回ったイタリアのQ3GDPが材料視された。

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所調査研究本部経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。